

トリイ・ヘイデン 『シーラとくろくろ』にみる 被虐待児と教育者

篁 倫子

トリイ・ヘイデンは、主に情緒障害教育の現場で出会った子どもたちとの奮闘と魂の触れ合いの体験を本にして世に表し、多くの人々に感動を与えてきたと言つてよいでしょう。『シーラという子』はヘイデンの処女作で、一九八〇年に出版されたものです。一九七〇年代のアメリカ、アイオワ州の地方都市を舞台とし、生まれ落ちて（シーラを産んだ時、母親はまだ十四歳であったことを

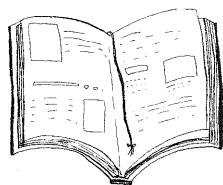
考えると）から、愛情も庇護も十分に受けることなく、貧困の中で、あらゆる虐待（心理的、身体的、養育放棄、性的な虐待）を受けてきた六歳の小柄な少女シーラが、数々の破壊的で、残忍とも言える攻撃的な行為を続けていきます。その中で、初めて自分を受け入れ、守り、愛してくれる教師と出会い、人を信頼し、人との間にきずなをはぐくむことを学び始めていく軌跡を、当事者で

ある作者が書きつづった実話です。

ヘイデンはその卓越した筆力で、シーラとの関係が築かれる過程や、それぞれに障害や深刻な問題をもちクラスメイトたちが織り成す日々のドラマを見事に書き表しています。

この本が悲劇の子どもと、慈愛に満ちた教師とのきずなづくりの物語に終わっていないのは、筆者の教育の専門家としての理解・行動、一人の人間としての自然な感情と行動、そして両者の葛藤を内省的に見つめる姿勢が、ストーリー全体に貫かれていくからでしょうか。

シーラが極めて優秀な知能をもち、聡明で美し



い少女であることが読者を引き付け、ストーリーを一層ドラマチックなものにしています。ヘイデン自身も、この比類なき少女を前に、魅了され、教師として強く動機づけされたことを偽ることなく語っています。

筆者がこの作品に感動させられた一つの大きな理由は、ヘイデンの教育者としての熱意と姿勢はもとより、その子どもの観方の確かさ、内的な洞察力、共感性の豊かさ、そして教育的判断の適切さと指導力にあります。彼女がシーラに対して行ったのは教育であり、同時に心理治療的なかわりです。彼女が特殊教育のみならず、臨床心理学的知識と訓練を共に果たしていても、実際に治療者と教師の役割を共に果たしていくことは容易ではありません。さらに、それが二十代の経験浅い時期になされたということに、心理臨床を専門としながら特殊教育にいくらかかかわって

きた筆者は驚嘆せずにはいられません。

もちろん、シーラが抱える問題（精神医学的には愛着障害）は五か月ほどの幸福な日々で解決されるものではないことや、ヘイデンとの別れが再度の見捨てられた体験となったことは続編の『タイガーと呼ばれた子』にも記されています。それでも、シーラにとつてヘイデンとの出会いと彼女から受けた教育は生きていく上での大きな力となったと言えるでしょう。

さて、わが国においても児童虐待は増加の一途をたどっており、最近値平成十七年度の相談件数は三万四四五一件であり、十年前の平成七年度の二七二二件と比べても桁違いの数であり、その内容も困難な事例が増加しています（厚労省HP）。相談件数の急増には、社会的認知が幾分高まってきた中で掘り起こしが進んできたことと、頻度そのものの上昇などの要因が考えられます、しか

し、相談に上がってこない事例を見積もれば、その実態は、なお厳しいものでしょう。

本書に描かれた三十年以上前のアメリカの後を追従するかに見える点は空恐ろしいことですが、虐待が、ある特定の社会経済的環境で起こるものとは限らず、日常的な保育や教育の場で虐待を被っている子どもに出会う可能性があるという認識を、われわれはもたなければならぬでしょう。

教育についてみると、昨年、二〇〇六年十二月に公布・施行された改正後の教育基本法では、わが国の教育の最も基本的な考えや枠組みに、いくつもの変更が加えられました。その中に、障害のある子どもに対する教育の目標、対象、内容、場についての改革も含まれています。

アメリカにおける特殊教育の枠と対象は州によって幾分異なりますが、情緒障害学級に学ぶの

は、原因はさまざまであるにせよ、心理的問題を背景にした情動や行動の問題および著しい不適応を示す子どもたちです。シーラはまさに、その際立った事例と言えるでしょう。一方、日本の情緒障害教育では発達障害である自閉症の子どもや心理的な要因による場面かん黙の子どもがその主な対象となっており、いわゆる行動問題や非行の子どもたちは支援の対象とされていません。

虐待を受ける子どもたちには福祉、司法、行政などの多方面からの支援が必要です。当然ながら、そこに教育的支援も含まれるべきです。しかし、現状では、教育の場においては虐待の通告は義務付けられていても、その子どもたちへの教育的対応について何ら具体的な策は講じられていません。

学校は、その活動時間の長さから言っても、子どもの様子を最も把握し易い場です。まずは虐待

を受けている可能性がある子どもに気づくことが必要です。そして、既に虐待を受けた子どもたちに対しては、個に応じた教育的配慮と支援が必要となるでしょう。虐待を受けた子どもが発達のさまざまな面で問題を抱えることは想像に難くないわけで、教育がより積極的・体系的にこの問題に取り組んでいくことが急務ではないでしょうか。

そして、教育がこの子どもたちに何をなせるかを考える時、『シーラという子』は大切なことを教えてくれているように思います。

(お茶の水女子大学)

参考文献

トリイ・ヘイデン (入江真佐子訳) 『シーラという子』

早川書房 一九九六

厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/>